
最後のプレゼント

バックハイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最後のプレゼント

【著者名】

バックハイ

【あらすじ】

ずっと一緒に過ごしてきた星奈と望。ある日離れ離れになつた二人が再会を果たす。もう一度、昔の様に一緒に居たいとゆう想いは叶う事なく最後の時間を過ごす二人。少し切ないラブストーリーです。（この小説はX-masギフト企画で書き上げました）

「…む。…のぞむ。」

誰かが僕を呼んでいる

幼い頃から何度も何度も聞きたかったその声
不意に僕の顔を覗き込む彼女

「…せ…星奈？」

僕は驚き一気に目が覚めるそんな僕をよそに、彼女が届託のない笑
顔で僕を見つめる

「望。メリークリスマス！」

そう言いながら、えへへと笑う彼女
幼い頃から何度も見て来たその笑顔
僕の大好きな大切なその笑顔
気が付いた時には僕は星奈を強く抱きしめていた

幼い頃からいつも側に居た星奈

昔から、こうやって僕を起こしに僕の部屋にやつてきた星奈
彼女と恋人同士になつたのは高校一年生の時。いつもと同じ帰り道
で僕が彼女にキスをした

あの時、星奈は泣いていた「嬉しい」そう彼女が笑いた時、僕はも
つと強く彼女を抱きしめていた
それから四年。僕らはいつも一緒に過ごしていた
早く自立して結婚も考えていた

「…星奈会いたかった」

彼女を抱きしめたまま何度も何度も呴いた。彼女の全てが愛おしくて、僕は何度も彼女の髪を撫でていた
そんな僕の方へと顔を向けて彼女が口を開く

「望…私も凄く会いたかった。…望少し老けたね？」

彼女がクスクスと笑いながら僕の頬を愛おしそうに…そして少し悲しそうに撫でる
そんな彼女を再び抱きしめ聞いてみる

「星奈…僕は変わってしまったかな？」

僕の問いに、僕を抱きしめ返して彼女が答える

「変わらないよ。私の好きな望のままだよ。…ただ、その時間の流れに私が一緒に居れなかつただけだよ」

彼女の言葉に胸が締め付けられる様だった
あの頃のまま変わらない彼女…

僕の大切な星奈

「…何故僕たちは離れ離れにならなければいけなかつたのだろう…
何故僕はあの時、星奈を助けられなかつたんだろう…」

ふと口にしてしまつた言葉に涙が溢れ出してきた

そんな僕の様子に気付き、顔を向け涙を拭ってくれる彼女。

「泣かないで望…。しうがなかつたんだよ。私は望に愛されたから幸せだつたんだよ?…だから…もう十分だから…望…幸せになつて。」

そう笑顔で答える星奈は本当に幸せそうな顔をしてくれていた。僕は何も答えられずにただ彼女を抱きしめた

「…望?私行きたい所があるの…連れて行ってくれるかな?」

ふと、僕の肩越しに彼女が言った…
僕は不思議に彼女の顔を見る

「お母さんに会いたいんだ」

少し淋しげに答える彼女

そんな彼女の頬を撫でながら僕は答える

「ちょうど僕も星奈に渡したい物があつたんだ…」

* * * * *

ピンポーン

インター ホンを鳴らすと、出て来たのは一人の女性。以前会つた時よりも随分白髪が増えた様子だ

「あら?望君?来ててくれたの?」

「そう言いながら笑顔で僕を家の中へと迎えてくれた
：ただ僕の後の星奈の存在には気が付いてはいない様子だった
：後から星奈が小さく呟く

「お母さん、随分老けちゃつたな……」

そんな彼女に僕は目を向ける。つられて星奈のお母さんも目を向ける。

だが、やはり彼女の存在には気が付かない様子だった。

家のなかへと足を進め向かつた先は一つの仏壇。

そこに飾られている写真は、星奈

仏壇の前に立ち線香をあげる

不思議そつに僕を見ている彼女に、箱を開け中から一つの指輪を取り出した。

「……これ。本当はずつと星奈に渡したかつたんだ……あれから五年もたつてしまつたけど……やつと渡せる。」

そう言いながら彼女の左手を手に取る。彼女の目からは涙が溢れていた

その様子を不思議そうに見つめる星奈のお母さん

眉をしかめて僕に問い合わせてくる

「……望君？……誰と話をしているの？」

僕はその言葉に返事は返さず、星奈の薬瓶に指輪をはめた。

多分、指輪が浮いているようしか見えないであつたが、星奈は驚いて星奈の方を見ていた

「……望君？……そこに星奈が居るの？」

涙を溜めて僕に問い合わせるおばさんに僕は黙つて頷いた
その様子に堪え切れなくなつた星奈がおばさんの元へと歩き出す
星奈が見えないおばさんは、動き出した指輪をじっと見ていた
その指輪が自分の元へとやつて来て、首から後へ回つて行くのを見ておばさんは自分が抱きしめられている事に気が付いた
：途端にその場に泣き崩れてしまったおばさん

そんな自分の母親と一緒に涙を流しながら抱きしめる星奈…

僕は、一人をそのままにしてあげたくてそつと廊下へと足を向けた…

「望？」

あれから少し経つて星奈が僕の元へやつて來た

「少し私の部屋に行かない？」

彼女がそう言って階段の方へと歩きだす

僕もそれに従い彼女の部屋へと足を向けた

…あの時まま変わらない彼女の部屋
僕は彼女のベットへと腰を下ろす

星奈も僕の隣に座り、僕を見ている

「望？…さつきも言つた事だけど…私ね、本当に望に幸せになつて欲しいの…私はもう、どんなに頑張つても望の側には居てあげれないから…」

そう僕に言つた彼女。

目には涙をいっぱい溜めているが、本当に幸せそうな表情だ。

僕はまた胸が張り裂けそうになり、何も言えないでいた
言葉の変わりに、彼女を抱きしめて唇を合わせた
とても軽く…初めて唇を合わせた時の様に…

「…望…大好きだよ…最後に会えて嬉しかった…」

彼女が吐息まじりで僕に言つ

僕は星奈を強く抱きしめた。きっと、もう一度と会える事は無いの
かもしねい。でも今だけは…彼女を離したくなかった。

「…パ。…パパ起きてー」

あれから十年…今の僕の目覚めは大切な娘…月奈から始まる。
…結局あの日気が付いたら僕は自分の部屋のベットの上だった
ただ、僕の記憶の中にはあの日の出来事が鮮明に残されていた
…それは星奈の母親も同じだったようだ…

そして…あの日から消えてしまった星奈の指輪。
それが、あの出来事が現実だった事を示していた

…せつと、あの時の出来事は神様が僕達にくれた贈り物だったのだ
と思つ

あの時、星奈と会つ事が出来たから円奈にも出会えたのだろう

星奈の母親もあの出来事から昔の元気なおばさんに戻つてくれた

そして、せつと星奈の薬指には今でも指輪が輝いているのだつ…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0632d/>

最後のプレゼント

2010年12月9日10時33分発行